

『コレクティブ 国家の嘘』

監督：アレクサンダー・ナナウ

出演：カタリン・トロンタン／カメリア・ロイウ／テディ・ウルスレアヌ
／ヴラド・ヴォイクレスク／ナルチス・ホジャほか

2019年／ルーマニア・ルクセンブルク・ドイツ／109分



公式サイト

DVD 発売中
発売元・販売元：トランスフォーマー
©Alexander Nanau Production, HBO
Europe, Samsa Film 2019

社会を旅する シネマ

きつと もっと 近くなる
きつと もっと 知りたくなる

ひとつ嘘をつく、それを隠し通すために嘘を重ね続けなければいけなくなる、とよく言われる。それが国家の場合、積み重なった嘘は人の命をも奪う。

2015年10月、ルーマニアの首都のライブハウスで火災が発生。27名の死者と180名の負傷者が出た。しかし一命を取り留めたはずの入院患者もその後次々に死亡し、64名にまで死者が膨れ上がった。不審に思った新聞記者が調査を進めると、病院の消毒液が10分の1に薄められていたことによる感染症が原因だった。さらにその背景には製薬会社、病院、政府との巨大な癒着、そして腐敗があった。

本作はこの事態をふたつの角度から追ったドキュメンタリーだ。ひとつは真相を究明するスポーツ紙「ガゼタ」の記者たち。過去にスポーツと政治の腐敗を多く暴いてきた。もうひとつは、事件後、新たに保健省大臣に就いたヴラド。政治家のキャリアをもたない33歳のヴラドは、政権の内部から腐敗の連鎖を断ち切ろうと意気込む。

政治の外側と内側の両面から「国家の嘘」を明らかにしていく本作は、メディアと個人（国民）がそれぞれにもつ希望と脆さを浮き彫りにする。まずはメディア。ガゼタ紙が不正の数々を明らかにしていくと、他のメディアも追従して問題を取り上げ、国民の監視の目は強まる。それは確実に国家の暴走を食い止める力となる。しかし、メディアが国政の批判をするだけの存在になってしまうと、変革の脚を

人の命を奪う国家の嘘 メディアと個人の責任は

アーヤ藍

引っ張ることにもなる。実際、改善に努めるヴラドを窮地に追いやるのもメディアだ。しかも疑惑付きの情報を矛にして……。

続いて個人。腐敗を明らかにする鍵となるのが個人の告発だ。患者を人として扱わない現場に辟易した医師や、病院理事長の暴言と不正会計に耐えかねた経理担当者などが、証拠を提示し、真相が明らかになっていく。彼らのように「黙っていたら共犯」「罪悪感がある」と良心を保ち、腐敗から抜け出そうとできるかは、個人によって分かれるだろう。実際、政治的圧力を受けて基準に満たない不正な認可をしてしまった移植局の担当者は、「認可の信頼が落ち、混乱を招くから」とヴラドが事実を公表するのを止めようとする。それは保身のための嘘だ。

政治的腐敗は一日で生まれるわけでも、ひとりだけから生まれるわけでもない。大小さまざまな嘘が積み重なった結果だ。そして国家の嘘を許してしまうのはメディアや個人の沈黙、無関心、諦念である。堆積した根深い腐敗を清浄にすることはできるのか。ヴラドの努力の成否を問うかのように、折しも選挙が行われることになる。選挙権も個人がもつ力のひとつだが、投票率は著しく低く……。

「他者の人生から学び、個人レベルで成長するプロセスが映画のあるべき姿だ」と監督が言うように、日本社会とも重なることが多い本作から私たちが受け取るべきことはたくさんあるはずだ。



アーヤあい：映画探検家。1990年生。慶應義塾大学卒。在学中に訪れたシリアが帰国直後に内戦状態になったことをきっかけに、社会問題をテーマにした映画の配給宣伝を行うユニテッドピープル（株）に入社。同社取締役副社長も務める。2018年独立、映画イベントの企画運営や記事執筆等を行う。

